アジア諸地域の農村生活の近代化と 伝統的諸要素との関係

別 枝 篤 彦*

Relation between the Modernization of Asiatic Rural Villages and the Traditional Factors

By

Atsuhiko BEKKI

Abstract

One of the objects in a geographical study of underdeveloped countries in various parts of Asia is to investigate the process of ecological changes of their rural communities, which, combined with various regional factors such as natural environments, patterns of land utilization, economic condition, social and historical structure of villages, religions, life cycle of the inhabitants or the level of contacts with the outer world, represent exceedingly complicated conditions. In aiming to visualize regional characteristics, a geographer must comprehend the changes from a synthetic point of view. At the same time, these changes show us different examples of modernizing process of rural communities which can be treated comparatively.

Through these investigations it is important to discover to what degree the traditional factors still dominate the rural life or hinder the process of modernization. By collecting these data can be obtained suggestions as to the speed and perspective of modernization of Asiatic rural communities. In studying these problems, the writer wishes to give special consideration to the religious factors which are inseparable from the rural life in most parts of Asia and to investigate the religious influence upon the patterns of land utilization as well as upon the economic status of the village life.

The construction of this paper is as follows :

- 1) Traditional factors perceived in the process of land utilization.
- 2) Traditional factors perceived in the daily life, especially from the standpoint of income and expenditure.
- 3) Changing traditional factors as the result of impact from outside.
- 4) Necessary conditions demanded for the modernization.

Investigations include various examples such as of the Philippines, Indonesia, Malaya, Thailand, India and Southwestern countries.

* 立教大学文学部

ま え が き

アジア各地の農村の研究にはまずその生態学的調査が先決条件である。そして農村生活の実態をみるには自然環境や土地利用の状況、地域社会の構造上の特質（家族、氏族、血縁関係など）、宗教、住民の生涯に共通してあらわれる種々な行事（いわゆる Life cycle）、経済状態（特に収支の状況）、外界との接触の程度などさまざまな要素を含んでいるが、地理学としては地域性の明確な把握という点から、これらを総合的な立場でとらえる必要がある。しかもアジアの後進的諸地域の場合、伝統的な要素が凡ての生活現象の上にまだいかなる程度にまで支配的であるか、あるいは近代化に対してそれがいかなる程度にまで障害条件となつていのかを考えなければならない。特に伝統的要素の中でも宗教関係のものは最も重要なものの一つであろう。それはアジア各地では社会組織の凡てが宗教と密着しており、両者は不可分のものとなつていところが多いからである。そしてわれわれはこれらの研究を通じて地域社会の近代化の速度や、またその将来の見通しについての手がかりを得ることができると思う。

(1) 土地利用に現われた伝統的、宗教的要素

われわれはまずモンスーンアジア地域における土地利用をとつてこの問題を考えてみよう。この地域の農村においては自然的、民族的多様性や文化、社会の歴史的条件による差異によつて土地利用にも各種の段階がある。すなわちモンスーン的環境に対する初歩的な適応形態から始まつて、永い歴史の間には一応農民としては巧妙かつ合理的と考えられるほど成熟した伝統的土地利用の形態へ、さらに近代における主として外部的要素との接触にもとづく一層合理的、科学的な土地利用の段階に至るまで、各種のものが空間的に同時に併存していることが著しい特色であるが、そのおのおのにやはり伝統や宗教が強く結びついているのである。

たとえば焼畑は最も前近代的な土地利用の方法であり、近代になつてたとえばマラヤ、フィリピンのごとくそれを制限したり禁止したりする方策をとるに至つた地域も多いが、なお東南アジアでは實際上広い面積が毎年これによつて開拓されている。Pelzer によればインドシナ山地では毎年 232 万 ha、タイ国では 140 万 ha がこのために使用されており、後者の場合、毎年焼畑として新規に開かれる面積は 20 万 ha にのぼるといふ¹⁾。こうして焼畑は全東南アジアの耕地の $\frac{1}{4}$ を占めることになる。しかも焼畑の実践は基本的には伝統的、閉鎖的、儀礼的支配をうける生活様式と結びつき、当該地域社会全体を包含する原始的宗教儀礼を必ず伴うものである。フィリピンの Mindoro 島における Hannoo 部族の実態をみると²⁾、焼畑をおこなう場所の選定から伐採、焼却、播種、収穫に至るまで仕事の全系列が、elaborate な祭儀と不可分の関係にある。たとえば土地の選定にさいしてはまず候補地について吉凶を占う必要があり、これには (1) その場所でおこなう占い (tahad) と (2) 呪術師の夢占い (tasinup) の 2 種がある。tahad をおこなうには開拓予定地にわずかの空地をつくり、先端を尖らせた長さ 50 cm ほどの杭を立てる。呪術師は自己の両腕の長さと同じく切つた植物の蔓の一端をこの杭にさしこみ、他の一端は地中にさして祈りの言葉を唱える。そして翌日蔓の長さを測つてそれが少しでも延びていれば吉兆とするが、そうでない場合は凶としてその候補地を放棄し、他に別の土地をさがすのである。客観的には開拓適地でありながらこうした卜占の結果放棄される土地は 1 年にかんがりの面積を占める。

焼畑の第 2 段階としての伐採も祭儀を伴う。伐採の直前部落に病人が出たり、斧の柄や刃が折れたりしたときは祭儀を行なつて仕事を数日間のぼす。死者があれば伐採は 5 日間禁忌となる。こうして超自然的観念による仕事の延期は 1 カ月 1 人につき平均 5~6 日に及ぶ。伐採した樹木を焼却するにも吉日をえらぶことはもちろん、これに従う人々は魔力をもつと信ずるサメの歯を必ず護符として所持しなければならぬ。これは“雷の舌”と称せられ、その所持者が呪文を唱えつつ 7 カ所に火をつける慣習となつていゝる。このほか播種、収穫にそれぞれ祭儀を伴うことはいうまでもない。焼畑は実にこうした閉鎖的社会的

宗教的伝統と固く結合する上に、地域としてはこれによつて 案外安定した生活が営まれていることを考へべきである。Conklin の記述では Mindoro 島の Yagaw 族の場合、焼畑によつて年平均反当約 1 石の収量があり、これは直接の消費と翌年の播種に十分の分量であり、しかもその約 10% は物々交換に使用されるという。焼畑耕作が容易には崩壊しない理由の一つはここにある。戦後インドネシア政府がチモール島の Sekong Project において失敗したのもまたこのためであつた³⁾。この計画は島の中央低地の草原 2500 ha をトラクターその他を使つて近代的方法で開き、ここに周辺の山地に居住する焼畑民族の Atoni 族約 500 家族を移住させて、1 ha 当り平均 1 トンの米と 1 トンのとうもろこしとを獲得させるものであつた。しかしこの計画は失敗に終つた。計画自体にも多くの欠点があつたが重大な理由の一つは Atoni 族がこうした定住的耕作には全く無関心だつたからである。かれらは計画が中止された報に接すると安堵の嘆息をもらしつゝ、嬉々として祖先伝来の生活へと帰つていつたのである。

水田はモンスーンアジア地域の自然に最も適応した土地利用形態であるが、その所有形態、灌漑排水の問題、集約化や施肥についても近代化されるには幾多の障害がある。たとえばマラヤでは歴史的な村落共同体的土地所有の慣行が近代になつて国有化されるとともに明確な土地所有制度が樹立されたが、そのさい農民の負担とされた測量費、登録料、譲渡に当つてのプレミアムなどについて多くの不満がみられる。また一般にここでは耕地が著しく細分化され、ケランタン州の Daerah Tanjong Pauh 村では 1634 エーカーの水田が 2709 筆に分けられており、部落によつては 202 エーカーが 542 筆にも分割されている。陸稲の畑はさらに細分化されている⁴⁾。これはイスラム相続法の掟によるもので、また息子は娘の 2 倍を相続できるため土地分割は一層複雑を極めており、これは結局耕作能率や収量の増加、分合計画などにはかなりの影響を及ぼすことになる。さらにモンスーンアジアでは米の収量増大のためには有利な自然条件を利用して二期作の実施も必要となるが、その導入は従来の労働の季節的な Cycle を改変させる点で抵抗を受けることになる。周知のごとく東南アジアでは稲作の全過程が複雑な宗教的儀礼と結合し、その大部分は稲霊 (Semangat Padi) を慰めるためのものである。これはイスラムの普及以前インドから伝わつたもので、その儀礼の日時は太陽暦を基礎としていた。しかるにイスラムの普及は太陽暦の上に太陰暦を重ねることとなり、米作の Cycle に混乱を生ぜしめることとなつた。太陰暦は季節の推移には無関係であるから、マライ、インドネシアなどイスラム地域の農民は耕作のプロセスおよび儀礼には依然として古い太陽暦によらなければならない。ことにイスラム地域ではこれによる農繁期がラマダン (断食月) と重なるときはほとんど農業労働が停止されてしまう。田植期の 3~8 月にラマダンが重なると最も大きな障害があらわれる。マラヤで 1947~49 年に著しい米作の減少がみられた主因は、ラマダンが恰も 5~7 月に当つたためであつた⁵⁾。こうした条件下にある社会にさらに二期作の導入をおこなうことが容易でないのは直ちに理解されるであらう。

水田裏作の問題にしても収穫後の休閑を利用する伝統的地力回復期 (このとき水牛を放してその堆肥を利用する) をつぶすことをまず解決しなければならないし、多角経営への意欲にも地域や民族によつて著しい差異がある。マラツカ付近でも相隣つて居住する中国人水田農民とマライ人水田農民との意欲の差がすでに指摘されているが⁶⁾、一般に熱帯作物はその成長が早いと急速に市場に氾濫して価格の低下を来すおそれがある。このためには熱帯各地に普遍的な作物を栽培しては損であり、いわゆる “original crop” を考え出さねばならないが、それは後進地域の農民自身では解決できないことは当然であらう。施肥についてもたとえば近年マラヤでは政府が半額を補助し、かつ村までの運送費を負担する声明を発したにもかかわらず、保守的な農民の反対にあつてみるべき効果を収めていない。

このような事実はひとり農村だけではなく、漁村においてもみられる。タイ国南部にある漁村 Rusembilan の例⁷⁾ をみると住民はイスラムの教義を固く守り、毎週木曜の夜から金曜の終日は漁撈に出かけない。それはイスラムがこの期間に利益を求めて働らくことを禁止しているからである。したがつてそのとき漁獲の機会があつてもこれを見逃すことになり、近隣の非イスラムの漁民に比べて不利な立場に立たさ

れる。村の漁民でこれについて不満を述べるものもあるが、これは村のイスラムの教義指導者 (imam) によつて “1 日余計な仕事をして稼ぐよりイスラムにしたがつて正しい生活をするほうがよい” と説得されてしまう状態である。要するに Bailey が論ずるごとくアジアの多くの地域においては土地利用が高度の祭儀化 (Ritualization)⁹⁾ によつて 地域社会の構造そのものと不可分の伝統を形成している。したがつてこれによつて 基礎づけられた社会が近代化の傾向をいかに受けとるかは、さらに地域に即して考えねばならぬであろう。

(2) 農村生活を支配する伝統的、宗教的要素

アジアの各地ではこのようにして宗教的要素がその伝統的な力によつて 特に農村生活を保守的な色でぬりつづし、新しい技術の導入や近代化を阻止しているのが一般的な傾向であつた。たとえばタイの農村が Wat (寺院) を中心に生活しているのはその典型的なものであろう。Wat はあらゆる意味で農村社会生活の中心であり、その有する多種の機能によつて支配的な地位を確立してきた。すなわち村の Wat は村民の相談所、無料宿泊所、医院、ニュース源、金融機関、貧民院、老人ホーム、スポーツセンターを兼ね、かつそれ自身大地主たることが多い。その上義務教育制度が施行される前は Wat が教育の場であつた。今も学校の始業式 (wajkhru) には必ず Wat の住職と僧を招き、教師と生徒は仏前に礼拝し、各クラス代表の児童のさし出す教科書に住職が “magic dot” をつけてから新学年の授業が始まる。終業式の日にも僧を招いて仏陀の講話をきく慣習である。その他あらゆる生活面においてタイ国ほど宗教が農村を支配する具体例を示すところはないであろう。

宗教的なものが農民の生計において占める割合はアジアの後進地域の農村をみる場合に特に重要なデータとなる。タイ農民は 35 万人 (全国人口の 7%) を占める僧の食費を全部負担するのみならず、その収入の大半を Wat や僧に投じるのを当然と考えている。すなわちこれに対する支出は家計において恒常的性質をもっている。Zimmerman はタイ農家の現金の 27% が仏教のために使われると推定したが、Andrews はこれはむしろ過小評価だとしており、Young の推定では平均 55%, 最高は実に 84% である⁹⁾。これは反面からみれば農民の財貨が Wat へ集中することを示す。人口 750 ほどの Bangkuad 村 (バンコックの北西 20 km) での調査によれば Wat の年収 3,8000 バート (約 65 万円)、住職のそれは 7,200 バート (約 13 万円)、一般の僧ですら 1,200 バート (約 2 万円) である。しかもこれは毎日寄進される食物はすべて除外した計算である。この村では 10 ライ (約 1.6 町) の耕地をもつ農民の現金収入は年に 1,800 バートにすぎないことと比較されなければならぬ¹⁰⁾。

インドネシアにおいては周知のごとくアニミズムにもとづく種々な祭儀 (スラムタン) が農民生活の中心をなしている。スラムタンは妊娠、出生から成長、結婚を経て死に至るまで各個人の Life cycle に欠くことのできぬ祭儀であり¹¹⁾、また農耕の全過程にわたつていわゆる稲米儀礼として現われる。その他生活上の各種卜占と結びつくが、これはタイ国の場合と異なつて家計では吉凶禍福を通ずる臨時費的な色彩が大きい。戦前のジャワ農村の家計調査でもこの祭儀に付随する饗宴の費用は平均 16% を占め、食費に次ぐ第 2 位の経費となつていたが、Life cycle に関する祭儀の最近の調査¹²⁾ でも平均して妊娠 7 カ月目の祭儀に 700 ルピア、割礼式に 1,500 ルピア、葬祭に 1,345 ルピアが投ぜられている。結婚式の饗宴費は実に 5,000 ルピアに及ぶ。その他夢占い、改名、ラマダン月の祭儀などに投ぜられる費用は実に莫大なものであり、600 ルピア (公定レートで約 4,800 円) の月収が今日のインドネシアではむしろ裕福なほうであることを考えると、こうしたスラムタンの費用の大きさが容易に理解されよう。蓄財による農民の生活の向上は全く不可能である。イスラムの祭儀によるマラヤ農民の結婚費用をみても花婿側の経費は大体 200~520 マラヤドル (約 24,000 円~62,000 円)、花嫁側のそれは 190~470 マラヤドル (約 23,000 円~56,000 円) となつており、これは双方に 50~200 マラヤドル (約 6,000 円~24,000 円) の不足となつて生活に著しい圧迫を加えることになる¹³⁾。ここでもマラヤ農民の平均月収が 6,000 円ほどであることと比較されねばならない。

インドの場合は地域が余りに広大であり、村の数も多くその地域差が著しくて概括は極めて困難ではあるが、一応共通な特色がみとめられる。戦後その伝統的社会制度は少しずつ変化し始めてはいるが、なおヒンズー教の支配力は農村生活の隅々にまで滲透し、村の共同体的性格や joint family 制度、さらにカースト制度と結合して土地利用をはじめ生活の凡ての現象においてヒンズー教的 ritualization が牢固として存在している。タイ国における尊敬の対象としての Wat の住職に相当するものはここではブラーマンカーストの Pandit である。戦後いわゆる不可触賤民階層 (Harijan) の身分改革の試みは各地で現われているものの、本質的にはそれらは凡て上層カーストの反撃によつて成功していない。しかもその場合不可触賤民の最初の希望は村のヒンズー寺院への自由、無差別の出入許可を得ることにあるのは注目されねばならぬ。かつてガンジーが農民に対し、宗教を守ることがいわゆる rural virtue を守ることで最大の利益の源であると教えたことがなお大きな影響を与えているのであり、農村での最大の関心事がなお宗教観念に集中していることがうかがわれる。しかもインド農村の場合、それは Majumdar が指摘しているように一つの強固な価値体系であり¹⁴⁾、他地域でみられるような農村と都市との生活の連鎖は本質的には存在していない。農村と都市 (Sahariya) とは全く別個の価値体系に属しており、この分離性が実はインドの文化遺産を今日まで支えて来た要素でもある。大都市 Lucknow から僅か8マイル離れるにすぎない Mohana 村の生活実態調査にもほとんど都市の影響が現われていないことに驚ろかされる。“この分離性が同時にインド農村の生活向上を妨げている最大の要素の一つである”とする論者もいる¹⁵⁾。

インド農村での生活水準はいうまでもなく極度に低いものであり、農業労働者としての不可触賤民の月収は15ルピー前後(約1,125円)である。1村の調査報告によれば¹⁶⁾夫婦と子供3人をもつ戦士カースト(身分的にはブラーマンに次ぐ)の農家では農耕と行商によつて年収426ルピー(月収にして3,000円足らず)をあげ、収支のバランスでは一応90ルピー(年に670円)の余剰がある。しかしこの余剰は吉凶など不時の入費のために装身具などの形に変えて貯えられておく慣習である。インドではインドネシアに比べると同様に宗教と結合する吉凶の祭儀のための臨時費的支出が大きな割合を占める。たとえば村で中程度の生活をしているある牧人カーストの家では息子の結婚にさいして150ルピー(約11,250円)を支出したが、このうち45ルピーは“花嫁代償”であとは饗宴費であつた。また貧しい戦士カーストの一家では葬式に当つて53ルピー(約4,000円)を支出した。このときも3日、10日、11日、12日目の祭儀は欠くことができず、またそのさい同一カーストの全員を饗宴に招かなければならなかつたのである。インド農村の慣習として祭儀の場合の費用はそれぞれ一定の minimum が定められており、当事者はいかなる工面をしてでもこれを守らねばならぬのである。

セイロンは近年社会主義的な政策をとつて国の近代化につとめているが、その農村生活や構造はカースト制その他の点でインド的なものの変形とみることができる。その寺院は伝統的に村の踊り子、太鼓叩き、歌い手、絵描きなどの宗教的サービスをおこなう人々の供給源であり、これらの人々は寺院に対する特別の農地の割当てによつて生活を保証されてきた。そのためセイロンの農地改革委員会も最近次のような結論を出している。“祭儀的なものはセイロンの生活で極めて重要な役割を演ずるが故にこの組織は破壊してはならない。Service-tenure の制度は寺院の場合には保存されねばならない”と¹⁷⁾。ここに農地改革の実施に大きな不徹底さがあらわれることになるわけである。

西アジアのイスラム地域においても生活に対する宗教と伝統の支配力は一層巨大である。レバノンの農村実態をみて¹⁸⁾、国際的な交通貿易の中心バイルートに近い位置にあるにかかわらず、イスラムの教義、血縁的集団および伝統的土地所有制が互に結合して村の一切の進歩を阻止しており、職業分化はただ都市の現象としてのみ理解されている。イラク南部の農村でも封建的軍事指導者であつたシャイク制度が1924年に崩壊したにかかわらず、なおイスラム、氏族および lineage による結合が村の生活の基盤である¹⁹⁾。ことに職業に関する身分評価がきびしく存在し、たとえ貧困でも耕作を営むもの(ただし野菜類の栽培を除く)は最大の尊敬が払われるが商業にしたがうものは最も軽蔑されている。これはコーランの記

述に忠実なためである。すなわち “ものを売買しない人間だけがアラーの神の記憶に生きることができる……アラーのもち給うものは売買される品物よりはるかによく、アラーのみが凡てのものを与え給う” (Surah XXIV) からである。またイスラム教は別に節約などを強制しておらず、むしろ美味なものを食し、美しい衣服をつけ、装身具で身を飾るなど財貨の合理的な消費を奨励する²⁰⁾。これは一方でラマダンなどを強制する反動かもしれないが、イスラムの大衆はこうした点からも貯蓄心がなく、貧困から脱却しえない一因を形成すると考えられる。近年イラクの中央集権化に伴い、この村にも政府官吏や警察官が駐在して地方の一つの中心となり、商店が建築されてきたが、店を経営するものは村の伝統的な居住者ではなく、奴隷に起源する最下位の氏族かまたは外部からの転入者に限られており、その居住区域も他とは区別されている。“貨幣経済と商業は村に落ちかかつてきた最大の悪” というのが村民多数の意識である。この村の主たる産業はユーフラテス川水辺の芦を採集しそれからマットを編むことにあるが、これによる家計は5人家族で平均月収4.5 Dinar (約4,500円) 程度である。しかし新興の商店経営者やマットの仲買人は月収30~100 Dinar (3万円~10万円) にも達して著しい経済的偏倚がみられる。Kathreen Langley は近著 “イラクの工業化” (1961) のなかで次のごとく述べている²¹⁾。“工業化に対する障害としての熟練工の不足は永く続くであろう。それは住民の Illiteracy と Indifference に深く根ざすからである。この場合 Illiteracy は教育によつて克服し得ると思われるからむしろ小さな問題であるが、Indifference はこの国における工業的環境の欠如と住民が工業社会の Value norm (価値の規範) を受け入れたがらぬことにもとづくので極めて厄介な大問題である” と。別の社会の Value norm を認めたがらぬことにはやはりイスラム的観念の強い伝統があるように考えられる。

さらにイスラム社会ではヒンズー教その他におけるような祭儀へ投ずる費用は少なく、また専門的聖職者がいないためそれらに奉納する金も別に問題とはならないようであるが、むしろそれに代る位置を占めるのは結婚制度と結びつく高額の “花嫁代償” ではあるまいか。イラク南部の農村の場合、同一 lineage 内の Endogamy のさいは 5~20 Dinar (5,000円~2万円)、lineage 外の Exogamy のさいは 50~100 Dinar (5万円~10万円) に及ぶ²²⁾。これがまた通婚圏を制限し他地域との交流を妨げることになるわけである。しかもイスラム社会では離婚が容易なので結婚の度に “花嫁代償” を支払わなければならない。これは家計を圧迫して負債の大部分を占めることになる。lineage は社会生活の単位であつてそこでの結婚は完全にリネージの長の支配下にあり、これに伴う慣習は全くイスラム的特質に支配されている。このほかイスラム地域では特有の伝統的土地制度として寺院に寄進された土地 (waqf) があつて大地主制の温存に有利な条件となつていることにも注目すべきであろう。

(3) 外界からの impact による伝統的要素の動揺

アジアの後進的社会における宗教的なものの力はこのように各地域によつてそれぞれの現われ方があるが、何れも伝統的社会構造と結合して牢固たる基盤をもっている。しかも好むと好まざるとにかかわらず、外界からの impact は今日の地域にも押し寄せつつあり、不可避的にその伝統的な基盤を動揺させ始めているのが現状である。たとえばタイ国ではかつての自給的米作から輸出向米作への転換による経済的変化が農村生活の各方面を動揺させ始めた根本的原因であるが、これは技術上の変化 (たとえば直播法から移植法へ)、人間の地域的な移動を惹起し、また都市との接触の増大は村の年長者と青年層との間に宗教意識の断層を生ぜしめつつある。さらにこれと結合した政治上の中央集権的傾向は教育の場を Wat から学校へ奪つたのみならず、近年タイ国宗務省が Wat 管理の方法として村ごとに有力者を交える Wat 委員会を作つてその運営に当らせ始めたことによつて現実には僧侶の身分の弱体化をもたらしつつある。仏教的教義そのものへの影響はないにしても、これがため村落支配者としての Wat の機能にひびが入つてきたことは確かである。セイロンでも政府による学校建設が仏寺 (Pansala) の教育上の勢力を切斷した事実があげられよう。

インドの農村においてはカースト制度がブラーマンを頂点とし不可触賤民を底辺とする三角形状をなすといわれる。そこに変動が起るとすればその垂直性と水平性についてである²³⁾。じゅうらい上位カーストは垂直性の動揺については極度に警戒的であり、これを抑圧してきた。しかしかれらはそれが水平的なものである限り、これを妨害もしないし、関心ももたなかった。このことは今や重大な結果を生み始めている。すなわちこの水平的動揺や拡大は具体的には教育を受ける賤民階層の人口を上位カーストのそれに比べて著しく大きなものとし、かれらをして独自のヒンズー寺院を建設させ、かれらのために司祭する人人を探し出させ（一般のブラーマンは賤民のための祭儀の司祭は行なわぬからである）、また村の下級役人その他として金銭を蓄積させ、伝統的に複雑な祭儀の実践のために生活の苦しくなった上位カーストのものの土地を次々に入手している事実が至るところで報告されている²⁴⁾。賤民階層はもちろん宗教的祭儀からはまだ離脱し得ないけれども、身分の垂直的上昇は一応断念した代りに、教育と新職業の開拓に経済的地位向上の間隙を見出し始めているのである。インド農村の近代化はまずこのような社会構造の水平的動揺と拡大とを明らかにしなければならない。

西アジアのイスラム農村においては新興の商人階層に注目すべきであろう。もちろんかれらといえどもまだ部族的、宗教的な義務は無視できず、氏族や lineage 内の慣習や寄付金などはこれを守り、できる限り古いものとの一致に努力している傾向がみられる。しかし種々な点から判断するとこの新興階層がやがては経済的活動のみならず、理想や価値体系のすべてにおいて古い部族のそれとは異なる一つの社会的 Unit として勢力を増大するに至るのではないかと考えられる。イスラムの内部においても近年伝統を批判し、これとの対決を試みようとする知識人が現われ始めている。もつともこの場合でもイスラムを最高の宗教とする観念は不動であるが、他の外来の文明はただ物質面においてのみ優れているに過ぎず、したがってそれはイスラム社会が容易に追いつき得るものと考えているという²⁵⁾。しかしこの考えが発展すればやがては近代化の導入に進む道が開かれるとも思われるし、上記の新興ブルジョアジーの発達と相まっていわゆる Value norm の変化がもたらされるかもしれない。

(4) 近代化への条件

以上のようにみえてくると外界からの impact に対するアジア農村の適応の仕方には地域によつて著しい差異があることが理解される。伝統を固執し、新しいものを全面的に拒否しようとする極端な保守主義はなお多くの村の指導者層に支配的であり、それは惰性と結合して大衆をして一応急速な変化へは反撥的態度をとらせてはいるが、時代の動きはすでに至る処でこの伝統に崩壊面を生ぜしめつつある。一方この反対に急速に古いものを捨てて新しいものに置き換えようとする態度はたとえばセイロンにおけるごとく elite と大衆との分離を惹起している。そこでアジア農村での最も賢明な方法として、古いものの価値を認めて新しいものと調和させつつ近代化を計ることであるとの考え、いわゆる“guided development”の観念があらわれてくることになる。インドの Sastri 教授は、工業化がアジアの停滞的、半飢餓的農村社会を近代化させる唯一の方法であると結論しつつも、たとえば正に亡びようとしている村落の伝統的手工業の価値を十分に考え、その援助と発展、近代化を計ることが第一に着手すべき問題としている²⁶⁾。マラヤ大学の Fryer も最近の論文で同趣旨のことを論じ、“それは土着文化と不可分の一体をなすが故にナショナリズムの傾向と結びつけつつその国の全工業化のプログラムの中にくみ入れるべきこと”，さらに“たとえ生産額は僅かでもそれが村落人口に雇傭を与え、生活向上の道を開く点で重要なこと”²⁷⁾としている。さらにインドの Indra Sen 教授は、“工業化のプロセスは文化的に指導さるべく、村落社会から工業中心の社会への推移は能う限りゆるやかにかつスムーズに行なわれねばならぬ”と述べている²⁸⁾。これらを通じてみられることは工業化、近代化による radical な変動を喜ばず、漸進的、融和的な努力を試みようとしていることであり、同時に十分な指導の必要性を強調しており、これは帰るところ政治と教育の問題に結びつくこととなる。要するに宗教と伝統とは適当に指導されれば決して打破できぬ障害で

はないと思われるが、それには地域性を十分に検討しての努力と忍耐を要することになるのである。余り遠くない過去に同様な伝統的社会をもち、しかも近年急激な変貌を示しつつある日本の農村の実態をここで比較することは重要なことと考えられる。これについてはもはや十分の紙数の余裕がなくなつたが、近年 Beadsley, Hall, Ward などの研究に成る“Village Japan”に示された近代化した農村の例²⁹⁾(岡山県新池部落)は興味あるデータといえよう。そこにとられた農家の収支表をみると教育、新聞雑誌の購読などへの支出は大きな割合を占め、一方宗教、祭儀的なものへの支出はごく一部を占めるにすぎない。宗教的経費の稀薄になつている点は、村民の道德生活などへの影響は別としてやはり近代化への重要な条件であることを思わせるのである。

参 考 文 献

- 1) Pelzer, K.: Pioneer Settlement in the Asiatic tropics. 1945, p. 36.
- 2) Conklin, H.: Hanunóo Agriculture in the Philippines. 1957, p. 46-52.
- 3) Ormeling, F. J.: The Timor problem, a geographical interpretation of an under-developed island. 1957, p. 218-220.
- 4) Dobby, E.: Padi landscapes of Malaya. (Journal of tropical geography. Vol. 10, p. 34).
- 5) Ooi-Jim-Bee: Rural development in tropical areas. (Journal of tropical geography. Vol. 12, 1959).
- 6) Ooi-Jim-Bee: ibid
- 7) Frazer, T. H.: Rusembilan, a Malay fishing village in Southern Thailand. 1960, p. 154.
- 8) Bailey, F.: Caste and the economic frontier-A village in highland Orissa. 1957.
- 9) de Young: Village life in Modern Thailand, 1955, p. 76.
- 10) Kaufman, H.: Bangkhua, a Community Study in Thailand. 1960.
- 11) 別枝篤彦: ジャワ農村における Life cycle の研究, 新地理, 11-1, (1963).
- 12) Geertz, C.: The religion of Java. 1961.
- 13) Djamour, J.: Malay kinship and marriage in Singapore. 1959, p. 81.
- 14) Majumdar, D.: Caste and communication in an Indian village. 1958.
- 15) Majumdar, D.: ibid
- 16) Bailey, F.: ibid.
- 17) UNESCO: Traditional cultures in Southeast Asia. 1958.
- 18) Huller, A.: Buarij, a portrait of a Lebanese Muslim village. 1961.
- 19) Salim, S. M.: Marsh Dwellers of the Euphrates delta. 1962.
- 20) Berger, M.: Arab world to-day. 1962.
- 21) Langley, K.: Industrialization of Iraq. 1961.
- 22) Salim, S. M.: ibid.
- 23) Majumdar: ibid.
- 24) Bailey: ibid. 又は Majumdar: ibid.
- 25) 吉田光邦: イスラム社会の近代化(アジア地域総合研究連絡季報, 2.), p. 7.
- 26) Sastri, N.: Present Position of traditional cultures. (UNESCO. ibid. p. 23).
- 27) Fryer, D.: The development of cottage and small scale industries in Malaya and in Southeast Asia. (Regional Conference of Southeast Asian Geographers. 1962 に提出された論文).
- 28) Sen, I.: Traditional culture and industrialization in South India. (UNESCO. ibid.).
- 29) Beardsley, R. H., Hall, J. W. and Ward, R. E.: Village Japan. 1959, p. 212-213.